

# 日本がん分子疫学研究会 ニュースレター

2005年7月  
Vol.6, No.1  
事務局：〒113-8519  
東京都文京区湯島1-5-45  
東京医科歯科大学大学院  
医歯学総合研究科  
分子腫瘍医学内  
TEL：03-5803-5184

## 日本多施設共同コーホート研究について

J-MICC Study Group 中央事務局

名古屋大学大学院医学系研究科予防医学 / 医学推計・判断学 玉腰暁子

2005年度より文部科学省科学研究費補助金「がん特定領域・領域4」が「がんの診断と疫学・化学予防」に「分子疫学コーホート研究の支援に関する研究」班が設置され、そこから研究費などの支援を受け、新たな分子疫学コーホート研究J-MICC (Japan Multi-Institutional Collaborative Cohort) Studyが多施設共同で始まることとなった。その研究概要を紹介する。

### 1. 研究目的

本研究では、がん発生およびその他の生活習慣病死亡に関連する生活習慣、遺伝子型、生体指標(血液成分)の影響とその交互作用を探索確認する調査(追跡調査)罹患・死亡に先行して変動する生体指標、とくに臨床前担がん状態を反映する生体指標を探索確認する調査(発病前診断研究)参加時に集められた生活習慣、遺伝子型、生体指標の関連についての調査(横断調査)から構成される。

### 2. 研究対象者および協力者数

特定の地域に現住所をおく者、もしくは特定の検診機関および病院の受診者であって、調査参加時の年齢が35歳から69歳までの男女を対象とする。質問票記入ができない者は除く。各施設で5000人

以上のコーホートを構築し、合計では男女それぞれ5万人程度を募集する。

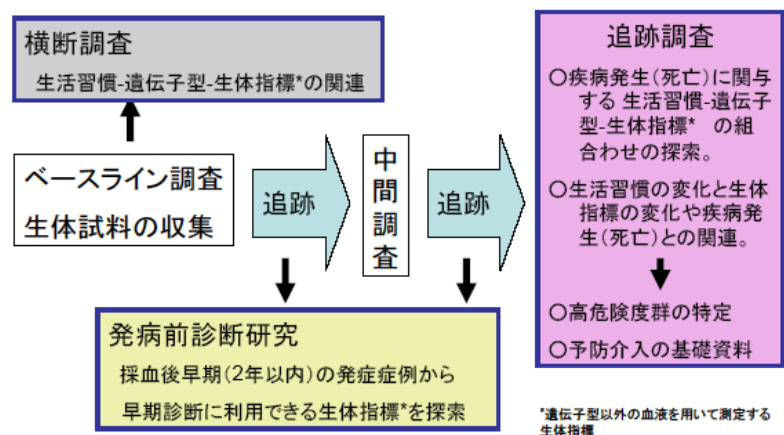
### 3. ベースライン調査: 2005~2009年度

自記式質問票調査および血液検体の収集を行う。質問票調査では、既往歴、運動・睡眠、喫煙飲酒歴、食生活、家族歴、生殖歴などを調べる。採取された血液からは、 Buffy-coat、血漿、血清を分離して、保存する。登録時に検診を行うコーホートについては、その検診結果も研究の対象とする。研究参加者には同意取り消しの機会を保障し、それを担保するため、各コーホート研究実施グループに研究参加者等の問い合わせに対応する窓口を常設する。

## CONTENTS

日本多施設共同コーホート研究について 玉腰暁子	1
第6回日本がん分子疫学研究会 学術集会を終えて 浜島信之	3
がん性化境遇 樋野興夫	3
アジア太平洋がん予防機構 田島和雄	4
アメリカ癌学会総会 Molecular Epidemiology Working Group レポート 松尾恵太郎	5
第6回日本がん分子疫学研究会 幹事会議事録要旨	6
写真報告 湯浅保仁	7
事務局からのお知らせ	8
編集後記	8

図1 J-MICC studyの概要



4. 第二次調査：2010～2014年度  
生活歴の変化および生体指標の変化を調べるために、ベースライン調査から5年ほど経った時点で、自記式質問票調査および血液検体収集を登録時調査と同様な方法で再度実施する。第二次調査にあたっては、ベースライン調査時点からの倫理指針の変更等、状況の変化を鑑み、あらためて文書と口頭による説明を行い、同意を文書で取得する。

#### 5. 追跡調査：ベースライン調査から2024年度まで

エンドポイントは死亡(がん、その他の生活習慣病、および全死亡)とがん罹患。死亡は死亡小票、がん罹患は地域がん登録、医療機関調査、対象者への問い合わせ、死亡小票、第二次調査などによる。対象地域から転出した者はその時点で観察打ち切り例とする。なお、2019年度以降に追跡期間の見直しを行う。

#### 6. データおよび研究進捗状況の管理

参加者情報の管理は、各コーホート研究実施グループで行う。中央事務局は、個人識別情報(氏名、住所、郵便番号、電話番号など)を除外した質問票調査・検診結果・追跡調査情報の提供を各コーホート研究実施グループから受け、提供された情報を集積し、研究の進捗状況を管理する。

#### 7. 進捗状況と研究成果の公表

進捗状況と研究成果は定期的に公表し、研究協力者および国民の理解を得るよう努める。

#### 8. 社会的・倫理的事項

本研究を実施する研究者は、研究協力者を研究参加に伴う危険・不利益から可能な限り保護するため、関係する法令および指針を遵守し、一定の基準に基づく参加時のインフォームド・コンセントの取得、同意撤回の機会の保障、個人情報保護に努める。また、研究モニタリング委員会および外部評価委員会のモニタリング・監査により

研究の透明性を確保する。さらに、研究者と一般の人々の間にある研究に対する意識のギャップを考慮し、問題を前もって認識し、回避できるよう提言を行なう社会諸問題検討委員会の設置も大きな特徴である。

#### 9. 研究組織

主任研究者：本研究遂行の総責任者。名古屋大学大学院医学系研究科 浜島信之

運営委員会：研究全体の進行状況を管理、調整し、本研究実施の責任を負う。

中央事務局：名古屋大学大学院医学系研究科内に設置し、研究全体の事務を担当し、J-MICC Studyで収集する情報・生体試料の管理を行う。

コーホート研究実施グループ：参加できるコーホート研究は、その協力者が5,000人を超えると予想できるものとする。参加研究者は、各コーホート研究を遂行する責任者および担当者である。収集されたデータと生体試料を中央事務局に提供する。

社会的諸問題検討委員会：研究実施をめぐる社会問題について検討し、本研究の実施方法について提言を行うグループである。

研究モニタリング委員会：各コーホート研究実施グループの研究ならびに本研究全体の研究計画の倫理性と科学的妥当性の検討、ならびに研究遂行中のモニタリングを行う委員会で、日本疫学会から推薦された外部の研究者および有識者から構成される。

外部評価委員会：研究の計画、遂行、運営などが適切に実施されているかを客観的に評価する委員会で、運営委員会が推薦する本研究に参画しない研究者および有識者から構成される。

コーホート研究実施グループ  
(2005.5末現在)：

名古屋大学大学院

浜島信之、玉腰暁子、内藤

真理子

愛知県がんセンター研究所

田島和雄、若井建志、松尾  
恵太郎

滋賀医科大学

上島弘嗣、喜多義邦、中村  
保幸

鹿児島大学大学院

嶽崎俊郎、新村英士

九州大学大学院

古野純典、豊村研吾

千葉県がんセンター研究局

三上春夫

京都府立医科大学大学院

渡邊能行、小笹晃太郎

名古屋市立大学大学院

徳留信寛、鈴木貞夫

佐賀大学医学部

田中恵太郎

Working Group(計画書策定など)

若井建志、今井一枝、橋本修二、  
江口英孝、内藤真理子、織井優佳、  
佐藤恵子、菱山豊、丸山英二、  
増井徹、松井健志、山本貴子、  
玉腰暁子

J-MICC Studyは、生活習慣、遺伝子型、生体指標をベースにその後のがん罹患・死亡との関連を見るコーホート研究としては、国内で初めての規模となる。参加グループの今までの経験を活かしつつ、対象者に配慮した適切かつ妥当な研究が行えるよう、努力を重ねている。現在、研究参加グループを随時募集している他、がん予防につながる成果を得るために生体試料等の測定項目を検討している。多くの先生方からご助言いただければ幸いです。

詳細は [tamaa@med.nagoya-u.ac.jp](mailto:tamaa@med.nagoya-u.ac.jp) まで

## 第6回日本がん分子疫学研究会学術集会を終えて

第6回日本がん分子疫学研究会学術集会 会長

名古屋大学大学院医学系研究科予防医学 / 医学推計・判断学 浜島信之

2005年5月21日(土曜日)に名古屋大学医学部にて、第6回日本がん分子疫学研究会学術集会を無事終了できましたこと、会員の皆様に心からお礼申し上げます。

本会の学術集会では、「分子疫学研究の予防への応用」というタイトルで、同名のシンポジウム、湯浅保仁先生の特別講演「胃の炎症・分化異常・がん化、そしてエピジェネティック疫学」、大野欽司先生の教育講演「ポリモルフィズムの mRNA 代謝とタンパク機能に与える影響の解析」、John B Cologne先生の教育講演「Statistical Design and Analysis of Cohort Based Case-control Studies」、一般口演17題、

特別企画講演1題の発表が行われました。特別講演、教育講演では、胃がんへのプロセスにおけるエピジェネティックな変化の関与、多型の機能、統計解析手法に関して、有益な情報が紹介され、分子疫学研究会にふさわしいものとなりました。疫学は予防を目的とした研究分野であることから、このシンポジウムでは遺伝子環境相互作用の存在と行動変容への応用について活発な討議が行われました。特別企画講演として「日本多施設共同コーホート(J-MICC)研究の概要」を研究事務局長の玉腰暁子先生が紹介し、参加者にその概要を知っていただきました。

なお、参加登録カードにより確認できました本研究会の参加者は57人で、参加登録カードを提出されなかった方が数人程度あったと思われます。大学の講義室で経費のかからない方法で行いましたので、会員の方の参加費は無料、非会員の方は抄録集代を含めて1000円と致しましたが、思ったほど参加者がこれによって増えたわけではなく、少し残念でした。懇親会では参加者の意見交換が十分行えましたこと喜んでおります。本研究会の更なる発展を祈念しながら、会員の皆様方に第6回学術集会につきましてご報告させて頂きました。

## がん性化境遇 - 山極勝三郎人工発がん90周年記念 -

順天堂大学医学部病理学 樋野興夫

発癌の3ヶ条は、1) It's not automatic. 2) It has a process. 3) It takes time. である。大成するには、境遇が大切である。これを「がん性化境遇」(山極勝三郎)という。つまり、境遇が変われば、同じように遺伝子の異常があっても、がんの発生は大きく違ってくるということである。予防、治療の介入が出来る根拠がここにあると考える。まさに、山極勝三郎の発がんの「形成的刺激」の「温故創新」である。

20世紀は「がんをつくる」時代であった。日本は化学発がんの創始国である(山極勝三郎、吉田富三)。21世紀は、「がんを遅らす」研究で世界をリードするときであ

る。がん研究の目的は、「がんの原因論」を明確にし、「がんの制御」の根拠を示し、「がんの進展阻止」の実際を示すことであり、Intentional delay(故意に遅らせる)であると考える。「天寿がん」の実現でもある。発がんは、「非平衡状態」にあり、外部と相互作用する開かれた複雑系であり、初期状態(遺伝子型)が同じでも、外部から意識的に適時に介入すれば、ある特異点(表現型)で分岐し、多様性のある制御(演出型)が可能になるはずである。病気は演出型(ドラマタイプ)なるゆえに、予防と治療が可能になる。「がんの個性」は、「遺伝子発現病(gene expression disease)」「(遺伝子型)として、形態(表現型)に反映さる。形態学は、

治療感受性を含め、がんの個性を鋭敏に捉える局面があり、さまざまな遺伝子変化の総合的な効果が、がんの形態に最も良く表現されることがありうる。発がんにおける、遺伝子型(genotype)、表現型(phenotype)さらには、変えられる表現型としての演出型(dramatype)の概念を導入して、ヒトがんの「適時診断」と「的確治療」に資することは、ゲノム医療時代の病理学の使命であろう。俯瞰的な「がん学」と高度な、最先端の医学的知識が要求される。

世のすべての営みには「発展と衰退」の繰り返しがあることは歴史が物語る。「バクテリアの増殖」のサイクルは、「発展と衰退」を科

学の言葉を持って具象化して、我々に説明してくれる。

第1段階：誘導期

第2段階：幾何級数的に増殖する時期

第3段階：静止期

第4段階：自己融解期

会社、研究所、大学も、また、研究会、学会においても、いかなる組織も、同様の法則が成り立つのではなからうか。がん病理学者「吉田富三」を生んだ佐々木研究所の基礎部は来年3月で閉鎖とのことである。悲しい知らせである。筆者が25年間(25～50歳)の人生を過ごした癌研は大塚の地から有明の地へと引越してである。

「バクテリアの生き残り」は、(1)培地を新鮮なものに取り替えるか、

(2)バクテリア菌を入替えるかである。

新渡戸稲造は死去した1933年に『内観外望』を出版している。「国家百年の計というが、百年はさておき10年先も見えずして我々は、暗夜をたどっている。如何なる大患に当たっても、要は外に方角を過らず、内に正しき決心を有することである。遠きめぐみを有するものには、事実がその意思を援ける」とは、まさに50年、100年を見越したものを言い、実践する「人物」に共通する特徴でありましょう。

「いま、わが国に欠けているのは、なかならず現代を担う青年学徒の心に訴える、そうした理想と、それから生じるヴィジョンと情熱である」(南原繁)の言葉が静思される今日このごろである。時代の要請として「器」として歴史を動かしていくこ

とが「がん学者」の責務となろう。

参考文献

樋野興夫：『われ21世紀の新渡戸とならん』(イグレーブ刊)(2003年)

樋野興夫：『がん哲学 がん細胞から人間社会の病理を見る』(to be 出版)(2004年)

北川知行、樋野興夫 編：『日本の科学者 吉田富三』(メディカルトリビューン社)(2005年)

鴨下重彦 編：『現代に求められる教養を問う - 今、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄、吉田富三に学ぶ』(to be 出版)(2005年)

南原繁研究会 編：『南原繁と現代 - 今問われているもの』(to be 出版)(2005年)

## アジア太平洋がん予防機構(APOCP)

愛知県がんセンター 田島和雄

アジア太平洋地域におけるがん予防活動を推進するために発足したアジア太平洋がん予防機構の活動も軌道に乗りつつあり、第2回アジア太平洋がん予防機構学術総会学会は2004年11月1～3日(金～日曜日)韓国ソウル大学において Y-0 Ahn 会長(ソウル国立大学、予防医学教授)のもと開催された。本総会には世界から約70名(半分以上の40名は日本人)韓国の国内から180名の合計250名が参加し、成功裏に終えた。本学会の主題は「アジア太平洋地域におけるがん予防の新しい方向性」で、基調講演2題、特別講演4題、シンポジウムは8課題46題が一会場で開催され、さらにポスター演題101題が報告された。本総会の学術報告に関する内容を以下のように簡単に紹介する。

米国から招待された二名の教授

による基調講演では、M.D. Anderson Cancer Centerの W-K Hong教授が“Molecular-based Cancer Prevention: Passion, Promise and Success”と題して、米国NCIの2015年を目指したがん撲滅へ向けての戦略として化学予防の重要性とこれまでの研究成果を報告され、肺がんや口腔がんへの取り組みの重要性について強調した。一方、Fred Hutchinson Research Centerの J-D Potter教授は“What We Know and Don't We Know about Colorectal Neoplasia”と題して、大腸がんの発がん機序に関する世界の研究を幅広くレビューされ、最後に「大腸がんについてはがん細胞の進展に関する遺伝子変異などの情報も含めて他のがんよりも研究が進んでいると考えられているが、未だ多くの疑問が残っている。それらは、発がんの分子機序、

クリプト形成とその役割、腸内細菌の代謝や炎症における役割、発症部位の差の意義、性差など遺伝子の果たす役割、などである。

特別講演は韓国の国立がんセンターの C-M Kim 総長が「韓国の対がん戦略」を、私は UICC を代表して「アジア地域における UICC のがん



予防戦略」について、ソウル国立大学 Y-J Surh 教授は「食餌中に含まれるがん化学予防物質」について、韓国アジウ大学の K-B Hahm 教授は「消化管がんの予防における Cox-2 Inhibitor の役割」について、それぞれ紹介した。また、シンポジウムでは「がん登録の重要性」、「生活習慣、感染症とがん」、「分子疫学の進展」、「発がん物質と発がん抑制物質の分子機序」、「多段階発がんと病態」、「がんの化学予防」、「生薬は食物中の発がん物質、発がん予防物質」、「がん検診の方法と実施」など、今後のアジア地域におけるがん対策のための情報構築に必要な46題が取り上げられ、ポスター101題も含めて幅広く討議された。

本学術総会の歓迎会は日本の公衆衛生学会、衛生学会、疫学会などに旧知の多い E-H Kwon ソウル国立大学名誉教授が世話をされたが、最初の挨拶の中でアジア地域におけるがん予防の重要性について熱いエールを送られた。続いて、名古屋で開催された第一回学術総会会

長を務められた青木国雄先生が謝辞も含めて本活動を継続することの重要性について訴えられた。また、本学術総会に招待されていた台北市 Tsu-Chi 大学の C-J Chen 教授は開催期日の少し前に台湾の Minister of Health and Welfare に任命されたにもかかわらず、多忙な日常の公務を押して参加された。それに呼応して韓国厚生大臣からの励ましのメッセージもあった。さらに、Ahn 会長の計らいによる漢江に浮かぶ船上レストランを借り切った懇親会では、カラオケ大会が始まりアジア各国の歌がそれぞれの参加者から紹介され、アジア太平洋地域のがん予防研究仲間の意識が高揚した。

なお、同機構の第3回地方会は2005年4月25～27日(月～水曜日)、イランのラシュート市において F Mansour-Ghanei 会長のもと、主題を「消化管がん対策」として開催された(Asian Pacific J Cancer Prev 6:110-112)。また、第4回地方会は2006年1月、名古屋市において徳留信寛会長(名古屋市立大学、健康

増進・予防医学教授)のもと、開催の準備が進められている。さらに、第3回 APOCP-GA は2006年11月6～8日(月～水曜日)、タイ国のバンコク市において K. Thiravud 会長(タイ国立がんセンター総長)のもと、開催が計画されている。

アジア地域におけるがん予防活動の推進を目指し、本機構は学会議や機関誌を介した各国、施設間の情報交換を中心とした活動を2000年から実施しており、日本の国内会員を始め、UICC 日本国内委員会や各組織の支援を受けながら活動を継続している。機関誌 APJCP については少しでも雑誌の質向上を図るため、主編者のマルコム・ムーア先生や副編者の徳留信寛先生、津田洋行先生らを中心に季刊を目指し、2005年には第6巻2号(6月)まで発刊された(<http://www.apocp.org/>)、(2005/7/1)

## アメリカ癌学会総会

### Molecular Epidemiology Working Group レポート

愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 松尾恵太郎

このたび米国カリフォルニア州、アナハイムにて開催された第96回アメリカ癌学会(AACR)において開かれた Molecular Epidemiology Working Group(MEG)のタウンミーティングに参加したので、MEGの活動を含めて報告をする。

私は今回初めて AACR に参加し、MEG という存在を知った。AACR のホームページ (<http://www.aacr.org/page2809.aspx>)によると、1997年の春に AACR 内の Scientific Working Group の一つとして、「分子生物学的、生化学的な考え方や技術を導入した良質な

疫学研究」を推進することを目的に設立された。活動内容は、AACR 総会における関連プログラムの企画・実施、MEG/AACR 会員に対する総会以外のカンファレンスの企画・実施、若手に対する奨励等数多く謳われている。実際、今回の AACR の総会における教育口演、シンポジウム等において分子疫学のトピックに関するセッションがもたれていた。

タウンミーティングというのは、実際には MEG の年次総会のようなもので、新規役員の発表(今回 chairperson が Harvard School of

Public Health の David Hunter から Moffitt Cancer Center and Research Institute の Thomas Sellers に替わった)今後の活動方針、若手奨励賞の授与、関連会議のアナウンスメント等が約200名強の参加者の前で行われた。AACR なので当然アメリカ人が主体であり、日本人を含む他国の参加者は目立つほどではなかった(因みに日本からの参加者は湯浅会長と私の二人であった)。会の中で私の記憶に残るのは「MEG のメンバーに占める疫学以外の出身の人の割合が減っている」という MEG 執行部の現状認

識で、疫学以外の人を巻き込んでより学際的にしなければならない、という意志を感じた。日本の分子疫学はどうであろうか、と自身の現状を顧みる機会となった。その後、隣室でレセプションが開かれて和気藹々とした雰囲気の中、各々交流がなされ、その後三々五々お開きとなったのは日本における研究会などと同じであった。

以上が、タウンミーティングに関しての極めて簡単なサマリーである。せっかくの機会なので、今回のAACRにおいて取り上げられたMEG関連のセッションについていくつか紹介する。初日には、Timothy Rebbeckの座長で“Population Stratification: Trivial Pursuit

or Serious Concern?”というセッションがもたれた。日本ではそれほど意識することはないが、他民族がともに暮らす米国ではpopulation stratificationの問題をどう取り扱うかは深刻な話である。これに対する方法論的な話題を中心とするセッションであった。翌日にはDuncan Thomasが座長で、“A User Guide to the HapMap”という注目のトピックを取り扱うセッションが持たれた。教育講演では、“Gene-Gene Interaction in Cancer Epidemiology”と題して、多遺伝子モデルを想定した分子疫学研究について、主に生物統計学、bioinformaticsの立場から複数の演者が発表を行っており、個人的

には大変興味深かった。何れのセッションも日本癌学会等の総会ではそうそうお目にかかることがないものであり、とても勉強になった。MEGのAACRにおけるプログラム企画・立案に関する活動がとても有効に働いていることを羨ましく思わせられた。今後の日本分子疫学研究会の活動に大きな示唆を与えるようなMEGであったと考える。最後に、日本の分子疫学に携わる先生方にAACR/MEGへの参加をお勧めして、文章を締めくくりたい。

## 第6回日本がん分子疫学研究会幹事会議事録要旨

平成17年5月21日(土)名古屋にて、第6回日本がん分子疫学研究会(浜島信之大会長)が開催されました。同日、幹事会ならびに総会が開かれましたので、ここに幹事会の議事内容をお知らせ致します。また、幹事会での報告内容と決定事項はすべて総会でも了承を受けましたのでご報告致します(事務局)。

日時：平成17年5月21日(土)  
12:00 ~ 12:55

場所：名古屋大学医学部基礎棟会議室(基礎棟1階)

出席者：今井浩三、北川知行、清水憲二、梶村春彦、高橋 隆、田島和雄、津昌昌一郎、中地 敬、中別府雄作、浜島信之(司会)、樋野興夫、森 満、湯浅保仁

欠席者：菊地正悟、酒井敏行、笹月健彦、渋谷正史、園田俊郎、徳留信寛、中村 祐輔、廣畑 富雄、藤木 博太、三木 義男、吉川 裕之

記録：秋山好光(事務局)

### I. 平成16年度活動報告

#### 1. 研究会活動報告

(1) 今井浩三・森 満両学術委員長による第5回学術集会在平成16年5月21日に札幌で開催され

た。(2) ニュースレターが6月(Vol.5 No.1)と12月(Vol.5 No.2)に合計2回発行された。送付数は両方とも162部ずつであり、内訳はメールによるPDFファイル送信数が117、郵送が45であった。(3) 平成16年6月にメーリングリストが開設された。(4) ホームページが今回の研究会に合わせて更新された。(5) 会員名簿作成および発送、平成16年12月。(6) 平成17年3月31日までに新入会3名、退会2名、休会1名あり、会員数は合計162名となった。会員数の推移は年々増えているとの報告があった。

#### 2. 会計報告

平成16年度の会計報告(酒井、梶村監事による監査済み)が行われ、承認された。

#### 3. 平成17年度予算案

湯浅会長より平成17年度予算案が提示され、繰越金が多いことが

問題点としてあげられた。審議の結果、ニュースレター印刷・送付代、会費納付書送付料金および事務経費は平成16年度と同様となったが、研究会開催補助金の増額(150,000円から200,000円へ)、新たに予備費項目の設置(100,000円)、および残りを繰越金とすることで承認された。

### II. 新規役員、委員の選出

#### 1. 幹事交代

廣畑富雄先生、徳留信寛先生より幹事辞任の申し出があり、辞任が認められた。新幹事として古野純典先生(九州大学)、末岡栄三朗先生(佐賀大学)、林慎一先生(東北大学)の3名が推薦され、幹事会で承認された。後日、新規幹事の先生方よりご承諾をいただいた。

#### 2. 任期満了に伴う選出

酒井監事ならびに中別府編集担当幹事が任期満了となり、かわりに

浜島監事、樋野編集担当幹事が選出された。

監査：梶村幹事（継続） 浜島幹事（新規）

編集担当幹事：森幹事（継続） 樋野幹事（新規）

### III. 平成 17 年度の活動方針

#### 1. 次期（平成 18 年度）学術集会の日程について

第 7 回学術集会委員長の中地敬幹事から日程が報告された。

期日：平成 18 年 5 月 19 日（金）  
20 日（土）

場所：広島プリンスホテル

2. 次々期（平成 19 年度）学術委員長として、樋野興夫幹事が選出された。

#### 3. ニュースレターおよびホームページの方針

ニュースレター発行は年 2 回とし、ホームページもこれまで同様更新することが承認された。

#### 4. 平成 18 年度日本癌学会総会時の特別セッションの開催について

湯浅会長より、当研究会発展を目的として平成 18 年度に特別セッションの開催を行う案が提出された。このセッションは平成 18 年度日本癌学会総会開催時に本研究会主催によって行うこととし、幹事会で承認された。内容および形式については、今後具体的に検討することとなった。

#### 5. 学術集会の共同開催について

国内関連学会との学術集会の共同開催は、今後も継続して検討することになった。

#### 6. 英国 Molecular Epidemiology Group との協力関係の構築について

湯浅会長より、英国 Molecular Epidemiology Group(代表者:Chris Wild 教授、Leeds 大学)との協力関係の構築について説明があった。Wild 教授からチェコ、プラハで開催される AACR International Conference, Molecular and Genetic Epidemiology of Cancer (平成 18 年 7 月 2 日から 7 日)において協力関係の構築の打ち合わせを行うことが提案された。これらの内容は本幹事会で承認された。

## 写真報告

The Third Takeo Wada Cancer Research Symposium

"Molecular Targets for Cancer Prevention and Control"

タイ コンケン市 2005 年 2 月 24 - 25 日開催。

東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 分子腫瘍医学 湯浅保仁



左から筆者、  
Dr. Thiravud Khuhaprema (タイ国立がんセンター総長、2006 年開催の第 3 回 APOCP 学会会長、田島先生の項をご参照下さい)  
三輪正直筑波大学 (現長浜バイオ大学) 教授



懇親会におけるカラオケ風景。  
タイ、日、英、米の強い連帯ができました。

## 事務局からのお知らせ

### 会費納入のお願い

振込用紙を郵送いたしますので、平成17年度の会費の納入をお願いいたします。また、振込用紙に会費未納年が記載されている場合には、合わせて納金していただきますようお願いいたします。

### 編集後記

九州の中別府先生のスマートな編集から、一気に北海道の私へと編集担当が移動しましたが、東京の樋野先生が新しい編集担当幹事となりまして、強力にサポートしていただいております。東京医科歯科大学の事務局の皆様と放影研の今井一枝先生の忍耐とご指導に深く感謝申し上げます。今回は、第6回の学術集会会長の浜島先生からそのご報告をいただき、さらに、いよいよ動き出しましたJ-MICC Studyの概要を玉腰先生にご報告いただきました。また、田島先生と松尾先生からは、韓国で開催された学会のご報告と米国で開催された学会の中のワーキンググループのご報告をそれぞれいただきました。そして、樋野先生には、大変興味深い随筆とでもいべき原稿を頂戴いたしました。ご多忙の中、ご寄稿下さいました皆様に深謝致します。

癌分子疫学への取り組みが今後ますます発展し、癌の予防や治療に広く応用されていくものと思います。そのような未来が少しでも早く訪れますようお願い次第です。会員の皆様からのご報告、ご提案、研究のトピックスなどを募集致しておりますので、下記のアドレスへ随時、ご連絡下さいますようお願い致します。

連絡先 樋野 興夫（アドレス：[ohino@med.juntendo.ac.jp](mailto:ohino@med.juntendo.ac.jp)）

森 満（アドレス：[mitsurum@sapmed.ac.jp](mailto:mitsurum@sapmed.ac.jp)）

編集担当幹事 森 満